

# 『利他の心』

西脇市病院事業管理者・病院長 岩井正秀

新型コロナウイルスが現れて、間もなく三年が経とうとしています。発生後、ウイルスは急激に増殖し、世界の秩序を容赦なく蹂躪していきました。そして、何度も繰り返す襲来に対して、西脇病院も多大なエネルギーを持って戦うことが強いられました。その結果として、本来なすべき通常の診療に甚大な影響が出てしまったことは、痛恨の極みであります。しかし、悔いてばかりいても前進は無く、この年月から何を学び、それをいかに生かしていくかを考えながら態勢を整えなくてはなりません。そして、そのためには、もう一度、医療に重要なものは何かを見つめ直すことが必要であり、これを良い機会としたいと思うのであります。

昔まだ私が小学生の頃、クレイジー・キャッツという日本で最初といわれるコミックバンドが人気でした。そのメンバーの一人である植木等が歌うヒット曲の歌詞に「みんな世のため、人のため」というフレーズがありました。当時、県庁の事務職であった父は、機嫌が良いと、しばしばこのフレーズを繰り返し歌っていました。私は、子供心にも何か感じるものがあつたのか、その軽妙な曲調と大上段に構えた言い廻しを、楽しそうな父の顔と共に、今も良く覚えています。

「利他の心」という言葉があります。自分のことは少しぐらい後回しにしても、他の人のためになることをしてあげよう、という気持ちのことです。この夏に亡くなりましたが、経営者として高名な稲盛和夫氏もその著書の中で、事業において非常に大切なことだと書いています。しかしそれは自己犠牲ということではありません。あくまで自分を大切しながらも、他人の利することを行うということです。そのためには揺るぎない自己を持った上で、尚かつ、他者に対しても気を配り、手を差し出すことができるという、人としての大きさが求められます。稲盛氏は、そういう姿勢であれば必ず自分にも利となって返ってくると言います。「情けは人の為ならず」という諺と相通じるものでしょう。それとは逆に、自分中心で、自己の利益ばかりを追求するものは、昔から我利我利亡者と呼ばれ忌み嫌われるのは良く知られたところです。

医療に関しても、その根底には「利他の心」があると認識するのは、とても重要なことです。そしてそれは、まず一番には患者さんに対して向けられるものですが、それ以外にも、医療者であれば、同じ院内で働く個人と個人、異なる部署と部署、また異なる職種と職種の間でも大切にすべきものであります。さらには病院と他の病院や診療所との関係においても「利他の心」を持たねばなりません。

この長期間のコロナ禍は、人々の生活から潤いを取り去り、ささくれ立った間柄をもたら

しました。とりわけ大変な思いをした医療機関は、疲労の極みにおいて不安や無力感に襲われたこともしばしばありました。しかし、私達は通常診療の回復に向けて、さらには次なる波に備えるため、何度でも立ち上がらなくてはなりません。そして、その時に、私達にとって大きな力となるのが、「利他の心」なのではないでしょうか。私達の中から、いくらか小さくなっているとしても、シュバイツァーやナイチンゲールが消え去ることは決してないのですから。

一日の仕事がひと段落して、院長室に戻れば、窓の外はもうすっかり暗くなっています。椅子に腰を下ろして、書類や本が散らかった部屋を眺め、それから山積する問題を数え上げたら、一つ大きく伸びをしたあとで、歌うように呟いてみる晩秋の夜長なのであります。

—みんな世のため、人のため—

2022. 11. 30